

.....

大澤壽人(おおさわひさと 1906-1953)は、戦前は欧米、戦中・戦後は日本で活躍した作曲家・指揮者である。1933年ボストン交響楽団を日本人として初めて指揮し、1935年パリデビューで大成功を収めたが、没後は忘れられた存在だった。

1999年に膨大な自筆譜が公になり、2003年に代表作《ピアノ協奏曲第三番 神風協奏曲》(1938年作曲)のCDリリースが続くと、今聴いても斬新な作風が一躍脚光を浴びた。「生誕111年」となる今年は、急激に進む再評価によって注目を集めている。

大澤は作曲・編曲を合わせて総数1000に近い作品を遺し、創作期は4期 — I: 留学前(1922-29年)、II: ボストン・パリ留学期(30-35年)、III: 帰国から終戦(36-45年)、IV: 戦後から晩年(45-53年) — に分かれる。

◆大澤壽人: 富士山

II期の作品《富士山》は1933年2月に書かれた。大澤が留学したボストンは、美術館を中心に、当時からアジア美術への関心が深かった。大澤もそこで安藤広重の木版画を目にし、着想を得て「ピアノ組曲」を計画。全曲には至らず、この1曲のみ完成した。

《富士山》は低音域で漠として始まり、やがて鹿児島小原節の一節が聞こえてくる。その旋律が変容を重ね、背景にはオーケストラを想起させる音域が広がる。最後に余韻を残しながら消えていく音楽は、まだ留学が限られていた時代に、大澤が「はるかに離れた母国」に抱いた憧憬にあふれている。

◆大澤壽人: ソナチネ ホ短調

《ソナチネ ホ短調》もII期に属し、1933年5月に26歳で完成。作品名は「ソナチネ」だが、ピアノ独奏曲で最も規模が大きく、内容的には「ソナタ」と言える。創作の頃は大澤にとって重要な時期で、本作品は「ホ短調」の調号をもつが、調号のない無調作品を並行

して試みていた。20世紀前半は衰退した調性音楽に替わり、作曲家たちが独自の道を追求めた時代であり、《ソナチネ》もそれを反映している。

第1楽章「速く 活気をもって」は、ホ短調の第1主題とロ長調の第2主題の配置が伝統的なソナタ形式を踏襲するが、変拍子の多用や広音域のダイナミックな活用など、近代ソナタの特徴を備えている。

第2楽章「ややゆっくりと アダージョのように」は二部分形式で、冒頭2小節で示されるト短調の旋律が、多様に変容する。「主題として展開する」という西洋の楽曲構成法とは異なる美学を感じさせる音楽で、旋律は塗り重ねられる一方で淡く漂い、日本的な感性が際立つ。

第3楽章「速く生き生きと戯れるように」は、A-B-A-C-A-コーダから成る小ロンド形式。和音によるロンド部Aはアクセントが特色づけ、その間のBやCでは旋律に書き込まれた連符の複雑さが即興的な要素を表している。コーダ部は力感をもって終わる。

ていしゅうはるさんだい
《丁丑春三題》はIII期の作品。大澤のパリデビューの際、《ピアノ協奏曲第二番》世界初演の独奏ピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックスは、1925年に初来日。ドビュッシーなどのフランス作品を日本に紹介した貢献者で、パリでの共演後は、帰国した大澤を追うように4度目の来日を果たした。

《丁丑春三題》はその1937年(十干の「丁」^{ひのと}、十二支の「丑」にあたる年)、神戸の海員会館で彼が初演した。自筆譜表紙には仏語タイトル「Trois morceaux de printemps "Teichu"」と書かれ、春にまつわる小品から成る。80年前の作曲だが、今も瑞々しい名作である。

第1曲《春宵紅梅》は「夜想曲」と記されている。春の薄明りのやわらかさを感じさせるパッセージは、ドビュッシーの影響を思わせる。

第2曲《無為即興》は「とても表情豊かに」と指示され、漠とした印象を与えるが、緻密なプランによって、第1曲と第2曲共に旋律と構造の中心音が同じで、組曲として統一が見られる。

第3曲《春律醉心》は「奇想曲」で、春爛漫の気分が満ちる。花見の酔客の足取りのように始まり、《元禄花見踊り》の一節が聞こえてくる。宴を想わせる勢いある上行パッセージとグリッサンド効果の中で、《元禄》の冒頭が派手に鳴って終了する。